

白話か文言か：日本古典詩歌の中国語訳について（その一）

——謝六逸とその『日本文学史』

呉 衛峰

はじめに

本ノートのタイトルを如何につけるかについて、しばらく悩んだ。日本古典文学研究の分野において、「詩」とは漢詩のことで、「歌」とは歌のことである。一昔前ならいざ知らず、今の通念では、「日本古典詩歌」といえば、当然のこと、漢詩も含む。しかし、ここで議論されるのは日本古代の歌謡・和歌・俳句などのいわゆる和文学の「詩歌」、つまり poetry¹⁾ の翻訳であるが、それを意味する言葉は見つからない。だから、説明付きの「日本古典詩歌」ということで、ご寛恕を乞いたい。

また、「中国語訳」という意味で、「漢訳」を使用している研究者もいる。これも厳密にいえば、日本人も行っていた、和歌などを漢詩に訳したものを「漢訳」と称する習慣があるので、口語訳を取り上げる場合、誤解を招きやすい。「中国語訳」であるなら、文語訳と口語訳との両方を指すことができる。というわけで、今の便宜的なタイトルにしたのである。

(1) 白話か文言か：日本古典詩歌の中国語訳について（その一）

一九八〇年前後、中国の日本文学研究界では、和歌の中国語訳の方法についての論争があった¹。その中で、和歌の形式を重視し、それを訳すには単音節の文語より複音節の現代中国語口語の方がふさわしいと主張する論文がある。論文の論点を幾つか挙げてみる。

現代中国語には、多音節の言葉が多い上、単音節の言葉も存在するので、文の長短が調整しやすい。よって、表現力は非常に豊富になっている。和歌の音節数と一致させるのがより易くなり、訳文の構造が和歌の言語構造をそのまま映すことも難しくくない。以上の視点から見れば、和歌の言葉は、特定の時代の漢詩の言葉よりは、かえって現代中国語の口語に近いとも言えよう。

(中略)

例二、原歌：

渡津海の 豊旗雲に 入日さし 今夜の月夜 明らけくこそ

文語訳：

海上靡旌雲、鬢黠映斜暎、占知今夜月、輝素必可歎

口語試訳：

汪洋大海上、

旗幟般的彩雲中、

透射著夕陽、

看來今天的月夜、

一定分外地清涼。

右に挙げた文語訳は、詩的境地という視点からいえば、非常に美しいものであるが、形式と文の構造から考えると、そのいずれも原作の歌からかけ離れている。口語で訳せば、この問題は明らかに減少している²⁾。

説得力のある主張で、文中の口語訳も非常に面白い試みである。筆者が主張している異文化理解をめざすための口語訳の必要性とは同工異曲の趣がある³⁾。残念なことに、論争の後、口語訳がほとんど実践されず、文語訳は主流になって今に至っている。

上掲の論文は、二十世紀二十年代に、成仿吾、謝六逸、周作人などが口語で和歌と俳句を訳したことに触れている。教育家の成仿吾と随筆家・翻訳家の周作人と較べれば、早世した謝六逸(1896～1945)は無名に近い。しかし、謝六逸は民国時代(1912～1949)において、もっとも全面的に日本古典文学を紹介した人で、1929年に、上代から昭和初期までの日本文学の通史である、三百頁におよぶ『日本文学史』⁴⁾を上梓している。

謝六逸は公費留学生として1918年来日、翌年に早稲田大学専門部政治経済科に入学。1922年に卒業、学士学位を取得。早稲田留学時代から、欧米及び日本の文芸の翻訳を始めている。帰国後、商務印書館で短期間勤務した後、二十一年間にわたって復旦大学などの各大学で教鞭を取った。1945年8月に、46歳の若さで病死した。

筆者が謝六逸の『日本文学史』に注目しているのは、その中に日本の古典詩歌の翻訳が沢山あるからである。古代歌謡、和歌(長歌・短歌)、俳句に涉り、すべて現代中国語口語、すなわち白話で訳出している。以下、古代歌謡、和歌、俳句に分けて、謝の中国語訳を検討したいと思う。

一、古代歌謡の翻訳

謝六逸の日本古典詩歌の翻訳は、前記のように、すべて現代中国語口語に訳している。『日本文学史』は「緒論」の後、日本の上代文学の特徴と脈絡を説明しながら、記紀の歌謡より代表的なものを選んで訳した。

ここで、『古事記』所載の八千矛神（即ち大国主命）が沼河姫（沼河比売）に求愛したときの唱和が如何に訳されているのかを見てみよう。長いので、沼河姫の返歌のみを掲げる。

原文：

八千矛の 神の命

萎え草の 女にしあれば

我が心

浦渚の鳥ぞ

今こそば 我鳥にあらめ

後は

汝鳥にあらむを

命は

な殺せたまひそ

いしたふや 天馳使ひ

事の 語り言も 此をば

翻訳：

八千矛神！

我是柔弱的女兒。

現在我的心中，

正如飛翔在水渚上的

不寧靜的水鳥；

到了今晚上，

便像那浮在靜浪上的鳥一般了。

好好將護君的命，

切勿因愛喪了君的身！

我謹致此詞，

傳達我的腹心。

青山に 日が隠らば

ぬばたまの 夜は出でなむ

朝日の

笑み榮え来て

栲綱の 白き腕

若やる胸を そ叩き

叩き愛がり

真玉手 玉手差し枕き

股長に 寝は寝さむを

あやに

な恋ひ聞こし

八千矛の 神の命

事の語り言も 此をば。

日光没後、

到了夜間、

我開門來迎君、

君的笑顔如晨曦、

君將粉白的手腕、

摸我的軟如雪沫的酥胸、

擁抱我的酥胸。

白玉一般的、玉一般的手互相枕著、

伸長著股兒睡覺罷。

——且忍耐這一宵、

切勿因愛而心焦、

八千矛神！

対訳風に並べたのは筆者である。枕詞などの関係で、完全な対訳になっていないが、訳詩を一読して、非常に美しい恋歌という印象を受けた。「我が心 浦渚の鳥ぞ 今こそば 我鳥にあらめ 後は 汝鳥にあらむを」というくだりを、「現在の私の心中、正如飛翔在水渚上的／不寧靜的水鳥；到了今晚上，便像那浮在靜浪上的鳥一般了」と訳しているのは、かなり自由な意識といわざるを得ないが、それだけに、詩趣に富み、読者の心を引き付ける魅力的な訳に仕上がっている。謝六逸は八千矛神の恋歌に優美で男女の恋心をうまく描出しており、その一部は非常に「官能的」であるという評価を

あたえ、近代詩歌の中に置いて、遜色がないだろうと激賞した。二十世紀二十年代という時代は、中国の詩歌にとって、文語に取って代わり得る新しい詩語を模索し、形成していた時代でもあった。外国の詩歌の翻訳は、自ずから口語詩の発展に寄与していた。

「いしたふや 天馳使ひ 事の 語り言も 此をば」というハヤシ言葉の部分を「我謹致此詞、傳達我的腹心」と訳しているのも、何かの根拠があったと思われるが、今ではそのように解釈されていないようである。周作人は現代口語で『古事記』を全訳しているので、後段のみを掲げて比較してみよう。

青山上太陽隱藏下去了

漆黑的夜就來了。

像朝陽似的笑著來到這裡，

雪白的你的雙腕，

將抱著柔雪的酥胸，

互相擁抱著，

枕著雙雙的玉手，

伸長著腿安睡罷。

不要那樣的著急罷，

八千尊神啊！

這事情就是這樣的傳說罷。

比較すれば分かるように、周訳はより丁寧な訳で、謝訳で省略された「青山に」や「ぬばたまの」をきちんと訳出している上、ハヤシ言葉の部分も漏らさず中国語に移した⁷。ただし、詩趣の面において、謝訳の方が一段上のような気がする。「事の語り言も 此をば」を「這事情就是這樣的傳說罷（この事はこのように言い伝えよう）」としたのは、前段の「いしたふや 天馳使ひ 事の 語り言も 此をば」を「我謹致此詞、傳達我的腹心（私は謹んで以上の言葉をもって、私の気持ちを伝えよう）」とした謝訳と異なる注釈書によったのであろう。

二、和歌の翻訳

謝六逸は『日本文学史』で『万葉集』と『古今集』を代表的な歌人の歌の訳を通じて紹介している。先に『万葉集』の歌の訳を見よう。

まず、山部赤人作とする（一首目は根拠不明）歌の訳を二つ掲げる。

霜に寄せき

はなはだも夜ふけてな行き道の辺のゆ笹の上に霜の降る夜を（巻第十一・二三三六）⁸

訳：這樣的深夜休要歸去呀，

道旁的小竹上，

鋪著霜的夜。

山部宿祢赤人の歌四首（その一）

春の野にすみれ摘みにと来し我そ野をなつかしみ一夜寝にける（卷第八・二四二四）

訳：到春日的野外，

去摘紫雲英的我，

戀著郊外，

竟夜忘歸了。

いずれも美しい小詩にしたためてあるが、短歌特有の五・七・五・七・七調の音節数を移す意図がうかがえず、古代歌謡の訳と同様、形式的に自由な訳である。

つぎに、柿本人麻呂の長歌併せて短歌二首の訳を掲げる。

原文：

柿本朝臣人麻呂の、妻死して後に

挽歌

訳：

泣血哀慟して作りし歌二首短歌を并せたり——柿本人麻呂妻死後作

（卷第二・二〇七）

天飛ぶや軽の道は

遙遠的輕市，

我妹子が里にしあれば

是妻的郷里；

ねもころに見まく欲しけど

到輕市去的路途，

時時都想看見。

やまず行かば人目を多み

まねく行かば人知りぬべみ

さね葛後も逢はむと

大船の思ひ頼みて

玉かぎる磐垣淵の

隠りのみ恋ひつつあるに

渡る日の暮れぬるがごと

照る月の雲隠るごと

沖つ藻のなびきし妹は

黄葉の過ぎて去にさと

玉梓の使ひの言へば

梓弓音に聞きて

言はむすべせむすべ知らに

音のみを聞きてありえねば

我が恋ふる千重の一重も

慰もる心もありやと

我妹子がやまず出で見し

軽の市に我が立ち聞けば

若竟去了，要惹起人家的注意，

常常去呢，人家也會知道的。

我心中思付：

横豎日後要相逢，

便坐在屋內想念著度日

不去又何妨呢。

水藻似的附著我寢的妻呀！

你如落山的夕陽，

你如浮雲蔽著的月兒，

——逝了，逝了！

使者來告時

聽著他的聲音，

我無所措，

志下不寧。

我深深戀著的情

能有幾分得著安慰？

我妻平日眺望的輕市，

我立在那裡靜立著聽——

玉だすき 畝傍の山に

畝火山の鳥語猶昔，

鳴く鳥の 声も聞こえず

何處能聞我妻的聲音？

玉梓の 道行き人も

路上來往的行人，

ひとりだに似てし行かねば

更無一個似我妻，

すべをなみ

吁嗟！萬事皆休，

妹が名呼びて

喚著妻的名兒，

袖ぞ振りつる

拂袖而歸。

短歌二首（その一、次の歌二一はその二ではない）

秋山の黄葉をしげみ惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも（卷第二・二〇八）

訳：秋山裡的紅葉繁茂，

欲覓迷途的妻，

但不識山徑。

去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年離る（卷第二・二一一）

訳：去年看過的秋夜的月，

依舊照著，

同眺的妻，

漸漸的遠了。

依然として逐語訳から程遠く、自由な意識ではあるが、原歌にこもっている人麻呂の悲痛な心情がよく伝わり、ジーンと心に沁みこんでくる中国語の挽歌となっている。「水藻似的の附著我寢的妻呀！你如落山的夕陽，你如浮雲蔽著的月兒，——逝了，逝了！」、および結びの「吁嗟！萬事皆休，喚著妻的名兒，拂袖而歸。」における痛恨の叫びは、訳者の加筆といっても良いが、おそらく訳者は訳すというより、創作している心構えていたのかもしれない。

謝六逸は本書でほかに、大伴家持と山上憶良の歌も紹介し、訳しているが、紙幅のため割愛する。

『古今集』に対する紹介は、それぞれの分量と正比例して、『万葉集』の十六頁と比べ、ただの四頁に過ぎない。戦前という時代の反映でもあるが、後代への影響と文学史的意義を考えれば、やはり『古今集』に対してやや手薄の憾みがある。ここで、四人の歌人による四首の歌の訳を見よう。

まずは撰者である紀貫之の歌の訳を一首掲げる。

ひとはいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香ににほひける（巻第一・四二）。

訳：人的心は難知的，

只有我故郷開著的花，

它的香氣依然如昔。

『百人一首』にも選ばれた名歌で、しっとりとしていて、やや理知的な歌である。さほど技巧を凝らした歌ではないから、『古今集』の歌の中でも、訳し易い方に属するであろう。淡々として匂っている花の香りのような訳歌である。

次も撰者の一人である紀友則の歌の訳を掲げる。

年を経てきえぬ思ひはありながら夜のためとは猶こほりけり（巻第十二・五九六）

訳：頻年來，我抱著沒有消蝕的相思，

眼淚凍凝在我的衣袖上，

——沒有融解。

和歌翻訳の難しさは、掛詞がその最たるものであろう。友則の歌の修辭的中心は、「思ひ」の「ひ」に「火」を掛けたところで、それを受けて「夜のためとは猶こほりけり」という表現が成立するのだが、訳はそれを移すことができなかつた。歌のもっとも面白いところ、『古今集』歌の醍醐味が訳されず仕舞いである。ロバート・フロストの「詩とは翻訳で失われるものである」(Poetry is that which is lost in translation.) という名言を思い出さずにいられない。

次、壬生忠岑の歌の訳を一首掲げる。

寝るがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず

（巻第十六・八三五）

訳：我們在睡著時看見的，

能說那是夢嗎，

這浮世，我却不能看它是現實。

おそらく『古今集』の理知的な一面を強調するつもりだったのであろうか、非常に理屈っぽい歌を選んで訳している。小野小町の歌の訳も、夢現を主題とするものである。

題しらず

思つゝ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを（巻第十二・五五二）

訳：我相思著就寝，

也許會在夢裡瞧見那人罷！

如在夢中知道那是夢，

我就不情願醒了。

小町の有名な歌の一つと数えられているが、訳は説明的で、詩趣に乏しい。訳者の謝六逸はこのタイプの歌が苦手なのではないかと疑うほど、『万葉集』歌の訳のような生彩が欠けている。

三、俳句の翻訳

本書の俳句に関する言及は、芭蕉中心のものである。「閑寂（さび）」の美学を高く評価して、東洋人にしか理解できないと唱えた。芭蕉の名句三句を訳して紹介している。

古池や蛙飛びこむ水のをと¹⁰

訳：静寂的池塘，

青蛙驀然跳進去，

水的聲音呀！

訳の左に、注をつけて、「俳句は一句十七文字、即ち五七五調なので、ほかの言語に訳すのは非常に困難であるが、ここで何とか五七五調で訳を試みた」という。「閑寂（さび）」の美学を強調するためか、「古池や」を「靜寂的池塘」としている。本書で日本詩歌の形式美を理解してもらおう努力は、この一例のみである。数多い短歌の訳があるにも係わらず、その形式的説明はほとんど施されていないのに、俳句の形式だけを詳しく説明するのは不思議に思う。

右の句以外、謝六逸は自由体で芭蕉の二句を訳している。

鶯や餅に糞する縁のさき¹¹

訳：鶯鳥呀，

飛來屋前，

在餅上遭了矢。

かれ朶えだに鳥のとまりけり秋の暮¹²

訳：在枯枝上，

有鳥鴉棲止，

秋日的黄昏呀！

謝六逸が俳句の美学をとりわけ評価したのは、おそらく欧米の影響を受けてのことかもしれない。俳句を紹介する部分

における、イギリス人アストンの『日本文学史』(A History of Japanese Literature)やフランスでの短詩の流行への言及はそれを裏付けているであろう。

むすびに

知名度は劣るが、謝六逸は周作人と並んで、文芸界の知日派の一人と数えられると思う。ただし、彼は日本古典文学に対して、専門家たらしとするつもりがなかったようである。『日本文学史』の「序」において、彼は以下のように述べている。

時代は絶えず先へ進んでいる。日本の古代作品に対して、我々はすでに紹介する時間がない。ただし、近代の作品の中には、確かに中国に紹介し、我々の参考に供する価値のあるものが少なからずある。もし二千年來の日本文学の変遷の大勢および各時代の主要な作家と作品について二三知っておくとしても、それは無駄なことではなからう。本書は以上の考えのもとで、純粹客觀の態度で執筆したものである。

實際、謝六逸は『志賀直哉集』、『日本近代小品文集』など、近代文学の翻訳を上梓しているが、日本古典作品をまとめて翻訳していない。彼の興味はやはり近代文学にあるのだといえよう。

それにしても、謝六逸が訳した日本の古代歌謡と万葉歌が一品の詩作品である。筆者がここで謝六逸の『日本文学史』を紹介しているのは、中国語の現代口語体で日本の古典詩歌(とくに和歌と俳句)を訳すことが、可能である上、實際

成功した先例もあることを示したいからである。

筆者が不思議に思うのは、中国の言文一致運動以来、日本の古代詩歌を含め、外国の文芸作品を白話文、つまり現代口語文に訳するのが当然のこととなっていたのに、いつの間にか、日本の古典詩歌のみが文語体で訳されるようになった。五七五(七七)調か、三五三(五五)調か、五言四句か、七言二句か、そういう議論の堂々巡りで、白話訳(口語訳)か、文言訳(文語訳)か、foreignizationか、domesticationかの議論も、翻訳論、比較文学論というレベルで、やるべきではないかと考えている。喜ばしいことに、昨年、人民文学出版社が、金俸・呉彦の口語自由体訳による『万葉集』を出版した。「訳序」には、どうして口語体を取ったのかについて、一切触れていないのが残念であるが、袋小路から抜け出した最初の一步のように感じる。

筆者は翻訳の実践者ではないので、異なる立場で、言文一致運動以来の日本古典文学の翻訳史をたどることで、問題の核心に迫りたい。

注

1 李芒「和歌漢譯問題小議」『日語教學與研究』(北京：北京對外貿易學院，1979年第1期)がきっかけに展開された和歌と俳句の中国語訳に関する論争である。「北京對外貿易學院」は1984年に「對外經濟貿易大學」と改名された。

2 沈策「也談和歌漢譯問題」『日語學習與研究』(北京：北京對外貿易學院，1981年第3期)、二九〜三〇頁。原文は中国語簡体字である。なお、引用中の文語訳は、錢稻孫譯『漢譯萬葉集選』(日本學術振興會，1959年3月)、一六頁。沈策には、『万葉集』の抄訳がある(四平師範學院科研處，1978年または1979年)が、未見。

3 拙著「和歌の翻訳と異文化体験の問題―錢稻孫著『漢譯萬葉集選』を中心に―」『東北公益文科大学総合研究論集』12(東北公益文科大学，2007年6月)。

- 4 上海：北新書局、1929年9月。ちなみに、上海書店は1991年に、「民国叢書」の一種として影印した。謝六逸は他に『日本文学』（開明書局、1925年）があるが、未見。『謝六逸文集』「附録二：謝六逸年譜（簡編）」によれば、日本の古今文学への紹介であるという。
- 5 陳江・陳庚初編『謝六逸文集』（北京：商務印書館、1995年1月）、「附録二：謝六逸年譜（簡編）」。
- 6 『古事記』の引用は、新編日本文学全集（小学館）による。山口佳紀・神野志隆光校注。
- 7 尚、謝六逸の原書には、訳詩の元となる日本語がすべて掲げていない。
- 8 前掲『古事記』校注は「いしたふや」以降を、左のように現代語訳している。
 そう伝えてくれ、随従している空飛ぶ鳥の使いよ。できごとの語り伝えても同じように伝えているのですよ、このことを
 八七頁。
- 9 『万葉集』の引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）による。佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注。
- 10 『古今集』の引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）による。小島憲之・新井栄蔵校注。
- 11 小宮豊隆監修、阿部喜三男校注『校本 芭蕉全集 第一卷』発句篇（上）（富士見書房、1988年10月）、一一〇頁。
- 12 小宮豊隆監修、荻野清・大谷蔵校注『校本 芭蕉全集 第二卷』発句篇（下）（富士見書房、1988年12月）、五四頁。
- 小宮豊隆監修、阿部喜三男校注、前掲書、六三頁。